

直情

Passionate



白洲次郎

1902-1985

英国のケンブリッジ大学に留学。吉田茂の側近として連合軍軍総司令部と対等に渡り合い、日本の復興に尽力する。日本国憲法誕生の現場に立ち会ったのははじめ、初代貿易庁長官に就任、いち早く貿易立国を標榜し、通商産業省を誕生させた。東北電力会長としても戦後の日本の復興に先鞭をつけた。紳士としての「理念」と「規範」を貫き通した昭和の侍であった。「葬式無用・戒名不用」の僅か二行を通し、強烈な個性で20世紀を駆け抜けた。

豪敏

Large-Minded



白洲文平

1869-1935

一致英和学校卒業後、米国のハーバード大学・ドイツのボン大学での留学生活が長かったこともあって、考え方や行動も万事欧米流。帰国後三井銀行や大阪紡績会社に入ったが、人に使われるのを嫌い、綿貿易の会社「白洲商店」を興して巨万の富を築き、芦屋の広大な邸宅のほか伊丹に敷地約4万坪、美術館まである邸宅を建て、趣味の建築などに散財。昭和の金融恐慌で破綻する。この世に生まれて思う存分やりつくし、晩年は阿蘇山の麓に移り住み、まことに天晴れな最後だった。

英知

Wisdom



白洲退蔵

1829-1891

家は三田藩に代々仕えてきた、儒学者の家系。藩主九鬼隆義の抜擢にこたえ藩財政を立て直し、明治維新に際しよく一藩をリードして難局を乗り切る。幕府開成所教授であった川本幸民、清次郎親子を藩に招き洋学を興す。三田県大参事として太政官札の流通に努力した。また教学の振興に尽した。神戸に出て志摩三商会の運営に参加し、終始九鬼家のために尽くした。その学識と卓見を福澤諭吉も敬愛した。のち横浜正金銀行頭取や岐阜県大書記官などを歴任した。

激動時代を先駆けた 白洲家三代の軌跡

Taizo Shirasu

Bunpei Shirasu
(Fumihito)

Jiro Shirasu

明治維新、三田藩(旧三田藩)大参事白洲退蔵は、藩の財政改革を断行。その精神は息子文平、そして更に孫の次郎へと引き継がれ、それぞれが大きな仕事を成し遂げた。

三田市観光協会

さんだ観光案内所
079-563-0039

http://www.sanda-tourism.jp

没後 80 年記念「九鬼隆一 遺墨(遺作)展」

- 展示期間 平成 23 年 9 月 15 日(木)～19 日(月祝)
- 場 所 三田ふるさと学習館 学習室 (三田市屋敷町 7-33 Tel/Fax563-5587)
九鬼隆一の所蔵品を展示した「三田博物館」旧地の向かい側にあります。
- 時 間 午前 10 時～午後 5 時 最終日は午後 3 時まで
- 展示規模 掛け軸・扁額・書簡類・関連書籍・遺品等、40～50点を予定しています。
- 展示概要 掛け軸・扁額は、展示用パネルに掲示します。書簡類・書籍・遺品等は、
施錠のできるガラス製展示ケースにて展示します。
観覧者による閲覧が可能な関連書籍があれば、ご提供をお願いします。

- 主催 三田市郷土先哲顕彰会 後援 三田市 三田市教育委員会
- 協力 さんだ歴史友の会 三田市書道協会(後援・協力はいずれも予定)

記念講演 「九鬼隆一の足跡」

遺墨(遺作)展に合わせ、記念講演会を九鬼隆一の敬慕碑があります清涼山心月院本堂にて開催いたします。ご参加お申し込みをお待ちいたしております。



- 開催日時 平成 23 年 9 月 15 日(木) 午後 1 時～午後 3 時
- 講 師 岸田 達男 氏「男爵九鬼隆一の残したもの」(仮題)
- 場 所 清涼山 心月院 本堂
- 定 員 100人(先着順) 参加費無料
参加申し込みは、9月1日(木)より承ります。
詳細は、チラシ・三田市広報(伸びゆく三田)でお知らせします。

※三田市郷土先哲顕彰会への新規入会も、常時受け付けております。
下記事務局までお問い合わせください。(年会費 1,000 円)

展示・出品・講演会に関するお問い合わせ先

三田市郷土先哲顕彰会 事務局

〒669-1595 三田市三輪 2 丁目 1-1 三田市役所
三田市まちづくり部生涯学習支援室生涯学習課(担当 山崎敏昭・西尾嘉美)
電話 079-559-5145(直通) FAX 079-563-3611

National Treasures from the Golden Hall of Horyu ji Temple

国宝法隆寺金堂展 法隆寺金堂物語



九鬼隆一(1852~1931)



(2008年6月26日)

明治21(1888)年、政府の社寺宝物調査団一行20余名が1年近く、近畿5府県で調査した。文部省で「剛腕官僚」として知られ、宮内省に移ったばかりの九鬼が団長だった。正倉院宝物を除く奈良県下の「優等」約400点のうち4分の1を法隆寺が占めた。これを官報に大きく掲載、寺の名は全国に知れ渡った。明治22年から33年まで帝国博物館総長。明治30年制定の国宝制度の生みの親と言える。調査団には日本の伝統美術復興を唱えたフェノロサもいた。

閉じる

asahi.com

国宝 法隆寺金堂展

Copyright The Asahi Shimbun Company. Allrights reserved. No reproduction or republication without written permission

天岡均一

天岡均一は父源六、母野津氏むらの長男として明治八年(一八七五)十月十日三田屋敷町に生れる。幼時より活発な子で、いたづらが過ぎて両親が手をやき、五才で小学校にあげる程であった。祖父半左衛門基則は家禄二百五拾石一番組番頭を勤める重臣で、明治二年の藩政改革で小参事となり、廃藩置県後の明治六年家督を均一の父源六に譲り隠居した。その父源六も明治十六年均一に家督を譲り隠居して、明治二十三年七月三十日均一十五才の時、父源六は四十九才にて没し、前後して均一は単身上阪し暁星中学校に入学した。

明治二十五東京美術学校(東京芸術大学)彫刻科第五回生として入学、彫刻家竹内久一師のもとで古彫刻への造詣を深めていった。開校間もない頃で学生数が少ないこともあり、師弟相携えて和気藹藹とした中での製作研究であったらしく、その交際もひとしおのものではなかった。師竹内久一・高村光雲をはじめ、白井保次郎・新納忠之介・菅原大三郎など後々まで交流のあった友人の多くをここで得ている。在学中の作品に、明治二十九年の『猿』と翌三十年卒業製作の『老婆像』の木彫の作品がある。この時期均一は『三溪』と号していた。この時の卒業生は過去最高でそれでも僅か五名であった。

美術学校を卒業した均一はしばらく東京にいたらしく、折から明治三十一年東京美術学校を追われた岡倉天心は日本美術院を創立、日本画の他に彫刻工芸の部門を設け、均一もここで彫刻の実技担当をしていた。この美術院の事業に古社寺を巡っての古彫刻の修理があり、均一もこれに加わり、明治三十三年ごろ古社寺修理に出かけた新宮で、水野喜和と知り合い結婚、三田から母と妹を呼び寄せ大阪で新居を構えた。しかし病弱であった妻喜和は長女正子を出産後、間もなく郷里の新宮に去った。

均一は大阪に居を構えていたこともあり、よく三田に帰郷し、旧友と清流に釣りを楽しんだり、山に狩猟を楽しんだ。窯元に頼まれ三田青磁の原形の石膏像を残している。均一初期の作品には木彫りが多い、これは仏像の修理を手がけていたこともあって木を扱うことが主であったからで、次第に釜・懸垂などの茶道具や花入れ等鑄造による実用的な工芸品を造るようになり、彫塑作品も鑄造が圧倒的に多くなっている。明治三十六年第五回内国勸業博覧会に『大尉全身石膏像』を出品、更に明治三十九年戦捷記念博覧会に『大尉全身石膏像』で一等賞を受けている。明治四十年には三田の天神公園に『小寺泰次郎像』を依頼され建立した、他に大阪・神戸・三田・篠山などに建てられた屋外の大作の彫刻は、本来ならば人の目にふれ後世に伝えられるものであるが、戦時中の銅像供出の憂き目に合い取り壊されてしまった。明治四十二年第三回文部省美術展覧会に『彫刻師』と題する仁王像を彫る老仏師を扱ったものがある。

大正二年美校以来の親友で当時美校の教授であった津田信夫の妹香と再婚、次女夏子・長男一夫が生れて、家庭的にも恵まれた時代で、最も活発な製作活動を行ない作品でも充実している。同年第七回文展に『現身』と題する、うずくまる裸婦の等身大の石膏像を出品、これは均一の作品の中でも珍しく女性の裸体を扱ったものである。大正三年第八回文展には『昔を語りつつ』と題する等身大石膏の男子座像、大正四年第九回文展に『新年』と題する男子胸像、大正六年第十回文展には『むつかしきふし』と題する男子立像と、以後毎年文展への意欲的な出品がみられるが、後輩が審査員を勤めるようになったりすることもあり、文展への出品を止めてしまった。均一の公に目にする事の出来る唯一の大作は大正二年大阪市長池上四郎の依頼による難波橋の欄干の両端台の上に阿吽の相を成す四匹の『ライオン像』である。これには別に鉄製の雛形があり、石工を指図しての製作であった。大正四年大正天皇即位礼に宮中に献上された『国土、生成神像翌大正五年今上天皇の立太子式に献上された『住吉名神像』などが残されている。献上品は銀製であったが、同じ型からブロンズで鑄たと思われる作品は二点とも石崎家より兵庫県近代美術館に寄贈された。

大正九年七月均一は単身ヨーロッパに渡り、翌年二月に帰国するまでイギリス・フランス・イタリア・ベルギーなど主に美術館を巡った。大正九年の一月に親友広瀬勝平がナポリで客死していたこともあり、その跡を訪ねるのも目的の一つであった。

均一の製作の範囲は彫刻工芸にとどまらず絵画にもおよび、スケッチの類・山水画・俳画・大津絵などが多残っている。

外出の時もスケッチブックを離さず、手当たり次第に描きながら、また酒を飲み友人とうち興いながらも描くといった風であった。

実際均一の酒好きは有名で、貧乏して着るものは買わなくとも家に樽を据え、同好の士が集まって来客の絶えることがなかったという。自由奔放な生活と豪気な人柄で交際範囲も広く、作家仲間にとどまらなかった。同郷の新潟県知事村山道男の敵父村山芳三・甲賀卯吉・奥谷為蔵・和田精才・小寺謙吉・向井勉などは親友であった。

均一はかつて桃山病院長市川博士を訪れた際、浴衣を裏返しに着ていたのを注意されても平然としていた、白い縮の糊の強く利いた浴衣を着るのがすきで常に交際が広く貴賤にとられることなく奇行に富んでいた均一は、大正十三年肺気腫にかかり発病して僅か三日目の十月三日大阪真法院町の自宅で亡くなった、享年五十。

